



ずいひつ

後樂園プロ野球

結核予防会静岡県支部副支部長
(秩父宮妃記念結核予防事業功労賞第4回受賞者)
山下英秋

私は、40年余り静岡県清水市に住んでいる現役を離れた医師である。最近「プロ野球会選手名鑑2001」を購入し、今年もプロ野球公式戦が始まり観衆を沸かすかと思うと、年齢を忘れて胸がわくわくしている。目下私は自分なりの肺のCTの本を書くことに努力しているものの、一向に仕事が軌道に乗らず焦っていた矢先であった。プロ野球開始は私にもよき清涼剤なのである。

思えば、私がプロ野球ファンになりはじめは、昭和24年九州から上京して結核予防会結核研究所に就職した頃にさかのぼる。当時はなお戦後の社会的困窮が続いており、国民はこぞって心を安らげる娯楽を求めているが、当時はラジオ放送が主であった。その中で、プロ野球の放送には聴衆を惹き付ける魅力があった。わが家の生活も苦しく、毎月のやりくりが大変であった。以前から勝負ごとは嫌いではなかった私は、よくプロ野球の放送を聞きながら仕事をしていた。私は清瀬駅近くの2家続きの都営住宅に住んでおり、近所の少年達が巨人の帽子をかぶり、道路で毎日の様にキャッチボールをして遊んでいたが、彼らはセ・リーグの巨人ファンで、憧れの的であった川上選手の自慢話をよくしていた。この光景を見ているうちに、私もいつしか自然と強力な巨人ファンになっていった。

昭和26年に巨人の三原監督が、突然九州を本拠地としていたパ・リーグの西鉄ライオンズの監督に代わった。私は三原監督の大ファンであったので、西鉄に関心を持つようになった。私が九州人であったせいも、次第に大の西鉄ファンに変わっていった。三原監督は根っからの勝負師タイプの監督で、その手腕は高く評価されていた。数年後には西鉄は巨人を3回倒して日本一になった。

その頃私の研究は都内の大塚にある東京都鑑察医務院で、週2～3回出張して、「正常肺の解剖」の仕事をしていた。道順は清瀬から西武線の終点池袋で下車して、「都電池袋線」に乗り換えて大塚で下車した。この「都電池袋線」の大塚の先に後樂園(駅)があり、続いて水道橋で結核予防会の本部があった。後樂園球場は「セ」の巨人、「パ」の毎日オリオンズのフランチャイズであった。当時の球場にはナイター設備がなく、専らデイ・ゲームであったので、勤め人が平日に観戦するにはなかなか大変であった。その点私は運がよく、大塚の仕事が午後1時過ぎには終わったので、球場に行こうと思えば行けたのである。西鉄が来たゲームのうち、強敵毎日との試合はよく観戦した。このような環境に恵まれた私はますます熱烈な西鉄ファンになり、その勝負が日常の感情に及んだことも少なくなかった。ほかに趣味のない私にとってプロ野球は何よりの娯楽であった。その後まもなく、「都電池袋線」は「地下鉄丸の内線」に変わり、一方球場ではナイター観戦ができるようになり、何かと便利になった。今ではプロ野球はテレビ観戦で事足りる時代であり、今昔の感が深い。

